

周辺地域・地域内啓発に関する私論

(国連人権教育の一〇年に思うこと)

白井俊一

一 混沌から当たり前の人間へ

1 人生の転機

人生の転機は、誰にでも訪れるものなのでしょう。二七年前の一九六九年、私は「部落の世話ができる」「住吉支部の専従者になれた(錯覚)」との喜びの中で、教育担当として住吉隣保館(現、解放会館)に勤務しました。以来一五年間、解放教育推進のため、不就学・長欠問題、低学力、障害児保育・教育問題、校内暴力の課題などを泥まみれになって取り組みました。能力の限界以上の活動をしたとは自負しながらも課題は大きく、精神的にダ

ウンしました。それが第一回目の転機でした。

以来一〇年、解放同盟の共同闘争の担当者として、解放会館の啓発担当者として得た財産は「ノーマライゼーション」で、あたり前の人間(私)が、あたり前の社会(平和・人権・福祉)を築くために、当たり前の営み(人権活動)をするということでした。しかし、振り返れば「共生」という考えが不十分だったためか「何か人のためにしてあげている」という感覚が付きまとい「こんなに一生懸命やっつてるのになぜ自分の意見が人に伝わらないのか」という苛立と悩みを持つてきました。今、第二の転機が訪れ「私の成長のためにこそ人権学習が必要なんだ」という当たり前の「答え」に気づこうとしています。その整理のために文章を書き綴ります。

2 人間関係をつぶしているのは誰?

家庭内では、つれあいに「あんたと人生を共にするものが何もない。昔は、一緒に夢も見だし、語らいもあった。仕事、仕事で、偉そうに説教ばかりしていて本当に満足なの。悩んでいる様なフリしてるけど、自分の事も解かってないのに『差別はアカン』といつても誰が信用するの?!」という一撃でした。「もつともやナク」と内心思ってもメンツがたたず居直るだけ……。子どもたちにも「酒ばかり呑んで、訳のわからん説教せんといて!。建て前は、もう聞きとらない!」と言われる有り様。子どもの権利条約を読んでも国際家族年の行動計画を眺めても何の役にも立ちません。仕事場でも地域でも「白井さんとはつきにくい」「難しそうな顔して怖い」「挨拶もロクにしない」と聞こえて来ます。外では愛想がよいと評判(?)で「近眼で気がつかないんや」とテレ笑いでごまかしていますが、居直つてばかりもいられませんか。心の奥底で「指導者は、人を教え導かなくてはならない」と恰好をつけ「上」から発想し、仕事のことしか考えないという怠慢の中で自分を見失って来たのだと思います。

私は何のために生まれ、何のために生きて(生活と仕

事と解放運動)行くのか。忙しくて考えるゆとりがなかったと言えれば聞こえは良いけれど、逃げ道が無くなるのが怖くて「仕事(=解放運動)中毒」に甘んじて来ました。気がつけば、家族の中で孤立し、心を許しあい人生を語り合える仲間もつくれませんでした。表面は、親切さで取り繕い、内面は利己的で、人間関係が築きにくく、自己嫌悪と人間嫌いで過ごして来ました。しかし、気づきながらも改善の努力をロクにしなかったことが「行き詰まり」の原因だったのです。

3 やつと二回目の転機がやってきた!

心を許せる友だちがいらない、趣味が全くない、生活の広がりもないし、ゆとりもない、自分の殻に閉じこもつても寂しくない、仕事=解放運動=趣味。こういう人間が「心の豊かさ、人間関係の大切さ、コミュニケーションの再生」というメッセージを持って人権啓発の仕事をする、こんなに滑稽なことはありません。例えば、私が「上」から発想して「今の親には、親子の対話が不足している。人と人との付き合い方が人権の基礎だ」と企画した子育て講座に参加して、そのことが一番必要なのは、私自身であったのです。啓発講座で生き生きと自己実現している人たちをながめながら、私に欠けている「当たり前の

人間関係(＝人権の基礎)を築くイロハ)を組み立て直す必要があったのです。今では「仕事中毒人間」を少し脱却し、仕事以外の関心事も増え、初めて出会った人とも話ができるようになりました。「建て前人間」から「当たり前前」の人間へ!」「人間大好き人間へ!」「人間性の原理に覚醒し人類最高の完成に向かって突進する」ことの大切さによく気づこうとしています。

「肩肘張って来た自分に気づき、心を解放しようと考えてるだけでも人生バラ色に見えますヨ」と呼びかけたい気持ちで一杯です。人間関係に悩んでいる人、私みたいな仕事中毒の人、充実した人生を送りたいと願っている人に「人権学習をぜひどうぞ!」とお勧めできる啓発事業でありたいと思います。私たち啓発担当者自身が「勉強したい」という企画を建てていますが、多くの市民が求めている課題と、私たちの問題意識には必ず共通項があると考えます。一〇年間悩み続けたことと啓発事業の実践から今考えている私の「自己実現(生涯学習)プログラム」を記述します。

二 私の自己実現(生涯学習)プログラム

1 人間関係再生のために

「人間らしく生きたい」「人とキツチリつきあいたい」「未来を見渡し、希望を持ちたい」。そのため今何を考え、どんなアクションを起こさなくてはならないか、学んだことを整理してみます。

解放会館の講座、特に子育て講座(講師、古田富子さん、渡辺ひろみさん)で多くの示唆をうけました。なかでも「人の話を最後まで評価を交えずジックリ聞き取る」という一番簡単なことが、私には難しいことでした。そして、自分を見つめ、自分に正直に、ありのままの姿をさらけ出し、表現できること、そのために「私は、○○です」「私はこう考えています」と必ず主語をつけて話すこと、自分を大切にしたいと願うなら、出会いを大切に、多くの仲間をつくることなどです。

2 充実した今を!

悩んで来たことが水解するとゆとりがでます。今、私は解放会館職員として一番したいことは、ライフプラン

3 私の人生設計と行動計画

今を充実させ、人生の目標を建てるためには「私はこうありたい」というイメージを高める必要があります。私は、人生の縦軸(ライフワーク)に障害者・高齢者福祉を置き、横軸(仕事と解放運動)に人権運動を置いて「時代の申し子」でありたいと願っているので個人の行動計画をつくってみました。

① 未来への人生設計表(白井作成「将来予測表」と子育て講座をヒントにして作成) Ⅱ下図参照)

② 五〇〜六〇歳行動計画

・親他界相次ぐ。子どもの就職・結婚等で必ず部落差別が登場するので、家族の対話が重要になる。

・つれあいとの対話・生活づくり(登山、キャンプ、コンサート、観劇、医療、福祉)

・孤立しないため、趣味と生き甲斐づくりを通して友人づくり(古代史、ボラ

▽第一期	▽第二期	▼	▽第三期	▽
22歳 就職 解放教育・障害児教育	26 結婚 子出生 転機	30~32 40	50 現在 親他界・子結婚 障害者・高齢者福祉	60 退職 古代史研究・老人会
				75 死亡

ナー(生活設計支援)としての資質を身につけることと、解放会館の将来像(Ⅱ部落問題を根底にすえた「人権啓発+生涯学習センター」構想)を明確にすることです。同時にライフワークとして障害者・高齢者福祉運動と共同闘争に参加し、地域の新しいビジョン構築のための「新総合計画」づくりに取り組むということです。

しかし「仕事中毒」だったことが人間関係を破壊してきた要因であることに気づいたこと二三年、自分のために家族を大切に、友達をつくる努力もできるようになりました。家族はかけがえのない存在ですが一八歳の息子は振り向いてもくれず、対話の必要性をいやというほど味わっています。健康のために山登りを始めれば違った世界が広がり、コンサート、観劇なども昔の様にでかける様になりました。勉強しなかった古代史も二年前から研究会に参加し、東アジア交流史を学ぶためハンブルも勉強したいと思います。山登りと遺跡・博物館めぐりのついでにカメラも必要となりました。まるで私のために解放会館の啓発事業(市民劇場・子育て・福祉・ハンブルなど)がある様なものです。私の興味のある古代史、男性教室、ライフサイクル、カメラ、退職準備講座などの企画をしたいとも考えています。

ンティアなど)

- ・仕事と解放運動の継続。周辺共闘で、特別養護老人ホーム(万代池)実現
- ・退職後、老後の生活設計のために公的年金の不足分のマネージメント(貯蓄+個人年金+介護保険)
- ・退職金を割いて、書きためた文集を自費出版する↓「時代の申し子のたわごと(仮題)」
- ③六一〜六五歳行動計画
- ・つれあいとの生活づくり、趣味づくり、健康管理は、可能な限り継続する
- ・老人会準備活動⇨ボランティア組織、友達づくり
- ・古代史研究に没頭(六五歳で論文出版⇨印税で研究費?)↓「古代天皇制成立のカラクリ(仮題)」
- ④六六歳〜死亡(七〇〜七五歳)
- ・つれあいの世話・介護(逆の場合もある⇨本人は絶対イヤと言っている)
- ・老人会青年部に加入し、老人解放大学をつくる。友達に囲まれた生活⇨人権社会づくり
- ・在宅で頑張るつもりだが、場合によれば特別養護老人ホーム内で高齢者自治活動
- ・遺言状の作成(葬儀⇨無宗教⇨葬送曲は河島英五、播磨灘への散骨、遺稿集⇨編集を済ませておく)

されました。八八年、地元支部より「第三期の解放運動」に基づいて「解放会館の啓発事業の抜本的改革を行なうべき」との提言を受け、八九年四月よりその見直しと創造に着手しました。

その実践を模索中、四つの出来事から触発・ヒントを受けました。一つは、反差別国際運動(IMADAR)が、NGO登録申請中に国連人権小委員会から指摘された「他の団体(人間)にいかにか『奉仕』するかで、その団体(個人)の社会的価値が決まる」という言葉でした。二つ目は、九三年、解放同盟中央理論委員会「提言」とそれに連なる「組織改革大綱」の「全てのスタイルを大胆に点検し、考え方を建て直そう!」との提起でした。三つ目は、地方分権で、解放会館は住民サービスの最前線の役割を持つということです。四点目は「国連人権教育の一〇年」で、生涯学習計画の位置づけもあわせて個人レベル、地域レベルから人権教育の行動計画を作成することです。

2 解放会館啓発事業の見直しと到達点

住吉解放会館は設立当初から、とりわけ七七年の新築時から積極的に「施設開放」に取り組み、多くの区民の利用に供して来たので、見直し・改革の対象は「講習・

・子、孫に囲まれ、惜しまれつつ他界する

三 発想の転換から変革へ

まともに生きようとすれば、お互いの人間関係をスポイルする差別は絶対に邪魔です。私自身の経験からしても、生活・仕事でうまく行かない時、自分の責任を回避し、人のせいにし、うらみ、ねたみなど否定的感情が頭をもたげて来ます。人を陥れて自分を浮かびあがらせようとする思想、これが「差別意識」の根底にあるものです。部落問題を解決するための人権啓発・生涯学習の根元に「どう生きるべきか」「自分に気づくこと」「豊かな感性をもった主体づくり」「人間バンザイ」という視点を位置づけたいと考えます。以下、手探りで摸索して来た活動を綴ります。

1 啓発事業見直しの発端とヒント

現在の住吉解放会館啓発事業のスタイルになるまで七カ年の歳月を費やしました。八六年「地対協路線」が登場し、国民融合論に迎合して「差別は解消へ向いつつある」という認識にたつた同和事業終結論、エセ同和行為を口実にした糾弾否定、そして「隣保館不用論」が提出

講座を通しての啓発事業の充実・発展」ということになりました。八九年四月からは、地区内関連施設(解放会館、総合福祉センター、青少年会館)があつまり、各施設の啓発事業の点検・改革の作業に着手しました。以後二年間、研究・実験事業の中から多くの教訓を学び、九一年度から解放会館の啓発事業を本格的に開始しました。

当初の問題意識は、厳しい部落差別の現実を前にして、区民の人権意識・感覚を高めるために解放会館の啓発事業がどう有効的に対応できるのかという点にありました。七年間を経て整理した解放会館啓発事業の考え方は、一口に言って「命・生活・福祉・人権・国際連帯を根底においた生涯学習入門・交流事業」です。地域住民やさまざまなハンディキャップを背負っている人たちの本当の願いを大切にしながら、自立して主体的に生活していくための条件づくりを行なうことにしました。住民の生活感覚・ニーズを大切にして系統的に取り組むならば、必ず人権啓発の効果をおげることができると考えました。

四 解放会館啓発事業の展開と課題

啓発事業の概念を明確にするために柱を七点に整理しています。地域住民も周辺地域住民も豊かな人権社会を構築するために必要と思われるメニューを用意し、差別をなくしていくため、当たり前の人間として自己実現できる企画を工夫しています。なお、地域住民と周辺地域住民の結びつけ役は、解放会館の大切な役割であるとの認識から、地域住民と周辺住民との混在型学習に徹しています。また、年間三〇余りの啓発事業を四ヵ月ごと三期に分け、バランスをとって計画的に進めています。

1 交流促進事業……住吉市民劇場など

市民劇場は、年間三回、コンサート、演劇、落語など「何でも有り」の催しで、毎回三百余名が参加しています。解放会館と聞いただけで「部落の会館！」と足を遠ざける市民が多くなります。可能な限り会館の敷居を低くし、楽しい企画を追求し、会館の存在を広く市民に知らしめる入り口の役割を持っています。同時に啓発パネルや事業案内に触れることも目的としています。

2 地域内住民対象講習事業

隣保館設立当初から行なわれている事業で、現在は、毛糸編物・民踊・洋裁教室を実施しています。年齢層が高くなり、固定化していることが課題ですが、自発的参加が望めるかぎり存続します。九五年度からは地域の青年のニーズを発掘し、手話と英会話を開始し新たな展望がひらけています。

3 地域内外混在型・交流型啓発講座

人権を尊び、心豊かな市民生活を過ごすための生涯学習講座を七点に分類しています。年間三〇余りの講座に述べ三、五〇〇余名が参加しています。一番主力は四〇歳代と六〇歳代の女性で、若年層が少なかったのですが、企画の努力で改善されています。また、講座の時間が夜中心なので、子育て中の三〇歳代の参加は予想以上に少なめです。男性は、六〇歳代を除いては極めて少数で、現代社会の縮図を反映しています。地域内外混在型の講座なので、参加者同士の連帯が深まり部落問題や民族問題などの議論が自然な姿で表われており、これが最大の啓発効果であるかもしれません。(地域住民の課題は別項)

①生活環境講座……部落問題入門、人権、環境、国際連帯、高齢者問題、女性問題

市民生活に必要と考えられる知識獲得型の講座です。参加者数は、多くはありませんが講師を囲んで対話型で実施しています。

②自立促進講座……子育て、心理学、ボランティア講座など

人間が人間としてしっかりとした物の考え方を身に付けるための企画で、最も力をいれています。崩壊していく人間関係と共同体意識を再生させていくプログラムを用意し、心理学的講座を中心に実施しており「自分のためになった」「目から鱗が落ちた」と大きな反響があります。

③自己表現講座……自分史を綴る、話し方、デイベート(討論)、シナリオの書き方、手話

自分のことを相手に伝えるという最も基本的な力が日本人には弱いと感じています。そこで、識字学級の営みをヒントに個人の表現力を高める講座を企画し、好評を得ています。

④異文化理解……ハングル、英会話、国際交流講座

はずかしがりやで、引っ込み思案の日本人。国際人として未来を生きるためには克服しなければならぬことで

しよう。「違いを認めあつて共に生きる」というテーマは人権啓発そのものです。

⑤心と身体講座……ヨガ、ゆめ体操、心とからだシリーズ、護身術

健康志向が強い現在、最も人気の高い講座です。心と体は相互に関係しており、自分の能力にチャレンジできるのが人気の秘密ではないかと考えています。自分を見つめ直すことにも役立ちます。

⑥食文化講座……料理、お菓子づくり、ミソづくり、つめの教室

人間生活の基礎は食生活です。無公害で手作りの身近な題材を中心に企画し、講師もできる限り身近な地域の高齢者や男性に協力を得ています。男女共生もテーマにしています。

⑦趣味創作講座……革工芸、陶芸、カメラ、趣味の創作シリーズなど

趣味講座は軽んじられる傾向にあったのですが、心豊かな生活のためにも極めて大切なものであると位置づけ直しました。講師は、地域・周辺地域の女性などに依頼。

4 グループ活動……コーラス、英会話、ビデオ、陶芸、革工芸、ヨガ、(ハンダール)

会館主催講座の終了後、希望者が自発的にグループ活動をしています。現在六つのグループが、講師謝礼等を自己負担し活動しています。会館としては、宣伝や活動発表の機会を提供し、市民グループの自発的活動を広げることが究極の目標にしています。

5 図書事業……図書貸し出し、図書室催し、啓発ビデオ・機材貸し出し

平日午後(土曜は夜も)開放。人権図書を網羅し、絵本から読み物までそろえ、幼児から高齢者まで一、三〇〇名の登録で、年間五千名余りの利用があります。人権週間には図書祭りを実施したり、各種団体・個人の研修の相談と視聴覚機材の貸し出しも行なっています。

6 施設開放(貸し館)

設立当初から会議室とホール(定員三八〇名)は一般開放(貸し館)しています。現在では、年間七〇団体・述べ一万七千名(地域内団体の利用を除く)の利用があり、ホールでは音楽グループの利用も高まり、区内文化

活動の拠点になっています。会議室も夜は満室で、市民の教育・文化活動のため、親切で便利な解放会館を目指しています。

7 区内人権啓発活動との連携

人権啓発活動は、解放会館だけで完結するものではなく、学校教育・社会教育・家庭教育との連携と棲み分けが必要です。特に区役所(人権啓発推進協議会)との連携が重要で、区が各種団体と人権啓発指導者養成に、会館が区民の啓発に力点を置いています。九三年度より、住吉・住之江両人推協・両区PTA協・浅香解放会館の六者が集い「人・愛・ふれあいプラザ」を企画し、不特定多数の市民向け講演会を行い、連携を図っています。また、地域内の青少年会館や総合福祉センターとの連携も行ない、啓発体制を整えようとしています。今、私たちは、国連人権教育の一〇年の行動計画をつくるためネットワークを構築し、生涯学習と人権教育を統合したいと考えています。

五 地域内啓発、自立促進事業の新展開へ

第三期の部落解放運動の展開のキーワードは「自立」

ではないでしょうか。差別の桎梏から解放されたれ、たくましく生活を獲得し、自己実現を果たして行く行為が「自立」であり主体の形成です。私たちが一番励まされている自己教育活動は、識字に代表される取り組みです。近年、地域内では、障害者や生活保護者の自立促進学習の取り組みが進行し、自ら差別を取り除く努力を継続しています。ここに「地域周辺・地域内啓発」の原点があり、国連人権教育の一〇年推進の大切な視点があります。

しかし、地域内啓発の悩みと課題もあります。例えば、会館の事業に際し、覚悟してスタートさせたはずですが、全参加者の中で地域住民が二割、企画によればゼロの場合もあり「なんでやる?」企画の設定がまちがっているんやろか?」と悩んだこともあります。これが教育・文化を奪われてきた部落差別の実態であり「解放会館としての部落差別との闘い」であり、粘り強く取り組みようとしています。周辺地域に拡大し、かつ地域の啓発も深めるといふ二兎を追う重い課題が、二年や三年で結論を出せるはずがありません。

そうこう思い悩んでいる内に運動体の提起もあり、地域住民を対象とした同和事業地区協議会主催による「自立促進講座事業」の方針が打ち出され、九四年度後半より具体的事業が開始されました。地域住民にとっては、

地区協議会の啓発講座でも解放会館の講座でも自由に選べる機会が増えることになりました。「解放会館と地区協議会の啓発は、車の両輪」という確認のもと、地域の自主的な取り組みと深く連携を保ち、展望が明確になるようとしています。

1 課題がより多くある人の自立促進事業

①識字学級……毎週火、土(解放会館+住之江区御崎教室)

②ふれあいクラブ……解放会館を拠点に生活保護者の自立促進事業。生活規律を建て直し、人間関係回復を目標とし参加者七名が週五回あつまっています。将来、就労の道を拓くために、午前中、識字学習をおこない、午後、作業学習(農作業、地区内花壇の世話など)を行なっています。(厚生省の委託事業Ⅱ一般対策)

③第二作業所(ラポール住吉)……解放会館の一室で七名の障害者を中心に作業を行う生き甲斐・生活の場。なお総合福祉センターでは、障害を持つ地域内外の青年が、オガリ作業所を運営しています。(いずれも一般対策)

2 地区協議会啓発講座事業……解放会館はサポート

地域内固有の課題、急がれる課題について、身近な問題、将来の生活設計に役立つプログラムを選んで実施しています。とりわけ、誰かが何かをしてくれるという待機主義的、受け身の学習活動を克服するための企画に力をいれています。こうした事業を通してより興味が増加すれば解放会館の啓発事業の参加率も高まると期待しています。

* 九五年度事業Ⅱ貯蓄講座、福祉体験学習、福祉学習会、特別栽培米の田植え・稲刈り・交流会、アウトドア講座、子育て学習、絵本の会、防災学習会、健康教室、部落問題入門講座など

六 市民の自主的な人権運動がなければ、啓発は進まない

どんなすばらしいプログラムをつくっても知識を提供するだけで市民の人権意識が高まることはありません。二〇数年の部落解放住吉地区総合計画によって地域は一変したにもかかわらず、周辺地域の差別意識は改善されていません。人権啓発の前提には、市民の人権運動の存

在が必要で、地域の要求と周辺地域の要求を統一し、平和・人権・福祉を中心に置いた町づくり運動が一番の人権啓発活動です。幸い住吉・住之江区には長年にわたる取り組みがあります。これらの基礎の上に解放会館啓発事業や「国連人権教育の一〇年」の取り組みを積み上げ「人権応援団」から「人権理解者」へ、そして「人権実践者」へと意識の高揚をはかり、具体的な「人権草の根の結集体」を目指していかなければなりません。今回は紙面の都合で、活動項目だけ列記します。

- (1) 部落解放住吉・住之江区区民共闘会議、平和人権を考える女性会（労働組合、市民団体など）
- (2) 住吉・住之江ピースフェスティバル実行委員会（労働組合、市民団体、障害者団体、民族団体）
- (3) 両区人権啓発推進協議会、両区人権啓発推進委員（区内各種団体代表）
- (4) 世界人権宣言住吉・住之江連絡会（人推協＋区内行政機関＋解放同盟）
- (5) 住吉同和教育推進協議会（地域を含む小・中学校、同PTAなど）
- (6) 部落解放基本法制定要求住吉住之江区実行委員会（右記団体総和）
- (7) 大阪市人権条例を求める百人委員会

- (8) 住吉をよくする会による地域周辺町づくり（基本法実行委員会代表、各界著名人の個人組織）
- (9) 「国連人権教育の一〇年」行動計画・推進機関（住吉連合町会、幼稚園、地元小・中学校、同PTA）
- (右記団体の総和)＝検討課題

七 おわりに

試行錯誤の周辺地域・地域内啓発の取り組みは、ようやくスタートラインに立ったのだと感じています。「どうせ素人、失敗して勉強したらええ、今までの啓発が正しかったら差別はとくに無くなっているんやから……」と開き直っています。周辺地域啓発も地域内啓発も私たちの成長もと一石三鳥と欲張りながら「私たちは、人権啓発開拓団！」を合い言葉にしたいと思っています。そして、私自身もこの営みの中で人間性を取り戻し、成長を遂げて行きたいと願っています。最後に、今、一番大事に考えていることを繰り返して、本文を終えたいと思います。

- (1) 自分を鍛え、自分を大切に、仲間をつくらう！。そして未来を見つめ、足元から取り組もう。
- (自分が行きあたっていている問題は、ほとんどの市民が

感じていることに違いない)

- (2) 住民こそ主人公。地域住民の営みから学び、市民を信じよう。
- (3) みんな人権啓発を待望しているはず。的確にプログラムを組み立てられていないだけ。自立のための自己啓発プログラムをつくり、人権啓発パイオニアを目指そう。
- (4) 啓発だけでは差別はなくならない。町づくり運動に啓発を位置づけ、人権推進者を結集しよう。
- (5) 部落差別から出発し、周辺地域に飛び出そう。そして地域に戻り両者の発展をめざそう。
- (6) 全ての人権啓発の営みを統合し、「国連人権教育の一〇年」の行動計画をつくらう。地域行動計画をつくれるのは、地域にしがみついている者にしかできないと思いたい。